

地中海的オルタナティブ

パオロ・ジャッカリーア* + クラウディオ・ミンカ**
(北川眞也*** 訳)

Paolo Giaccaria and Claudio Minca
The Mediterranean alternative,
Progress in Human Geography 35 (3), 2011, pp. 345-365,
copyright © 2010 by (The Author(s)), Reprinted by Permission of Sage

摘要：本稿は、ポストコロニアルまた地理学的パースペクティブからなされる、イタリアとフランスの地中海研究の批判的展望である。ここで主張されるのは、地中海主義の文献、意外なことに、地理学においては不在であり続けてきたこの文献が、現代地中海のいくつもの地理と、主流派であるヨーロッパの数々のモダニティとの間にある関係性を見落としてきたということである。私たちは、地中海をポストコロニアルな海として再考することで、この隔たりの解決のために取り組みたい。地中海は、その現実的・比喩的な「流動性」において、「他なる空間」を探求するための肥沃な土壌に相当している。この他なる空間によって、地中海を「数々のオルタナティブ・モダニティ」を経験するためのインスピレーションの源にするような声の多義性と複数性が取り戻されうることになるのだ。

キーワード：数々のオルタナティブ・モダニティ、地理学、地中海、ポストコロニアリズム、南の思想

I 地中海を読む

ブレドラグ・マトヴェイェーヴィチは、彼の広く引用される『地中海——ある海の詩的考察』の冒頭のページで、地中海の境界と限界を定義する可能性そのものに疑問を投げかけている。「地中海には、時空どちらの面でも境界線は引かれていない。その境界を定める方法も、何を指標としてそれを定めるべきかもわからない。歴史、民族、国民、国家、どの点からも境界線を引くことはできない。それはチョークを使って繰り返し書いては消される円であり、波と風、作品と靈感が広がっては狭める円なのである」(Matvejevic, 1999: 10[1997: 24-25])。

あるひとつの／まさにその地中海空間の定義をめぐる問題に取り組むことは、この問題への「解決」を見つけ出すことを必ずしも必要とするわけではない。むしろそれは、なぜこの海の安定し安心感を与えるような地図化が不可能であるのかを、批判的なやり方で思索するよう導くものである(Minca, 2003参照)。実際、地中海の境界画定を行うこと／地中海を記述することは、現代地理学の思考と実践の核心に位置する一連の幅広い問題に触れることになる。本稿が提出しようとするのは、地中海、とりわけ地中海という空間についての一連の独特な地中海的思考方法というものが、今日の人文地理学の重要な理論的関心のいくつかを直接的に論じている

ということだ。歴史・人類学・文学研究はもちろん、国際関係論においても、地中海についての広大な文献が存在している。他国のアカデミックな文脈の地理学者、特にフランスとイタリアの地理学者たちによって地中海に与えられている重要性和比較すると、英語圏の人文・文化地理学における地中海の文献は、まばらなものにとどまっている。地中海はひとときわポストコロニアルな海であるにもかかわらず、信じがたいことに、英語圏のポストコロニアル研究の中心的な議論においてもそのプレゼンスはやはり限られたものなのである。いわば、地中海は、いくつかのオルタナティブ・モダニティの生産において鍵となる場としてよりも、ただ単にひとつの「地域的」な主題として扱われているというわけである。

本稿によって目指されるのは、ヨーロッパの数々のモダニティの空間について理論的に省察する際を中心に、地中海を再配置するということだ(たとえばMignolo, 2000参照)。私たちが論じるように、地中海の数々の地理は、ポストコロニアル・ヨーロッパの数多の地理の源でもあり鏡でもあるのだ(Young 2001参照)。大雑把に——数多くの注釈は伴うが——しばしば「地中海研究(Mediterranean studies)」と呼ばれる主にフランス語とイタリア語、そして英語で書かれた文献からなる広大な領域から、いくつかの文献を選び出すことによってこのことを示そうと思う。以下は、この文献のいくつかの

* トリノ大学

** ロンドン大学ロイヤルハロウェイ校(現在はオランダ・ワーゲニンゲン大学)

*** 三重大学人文学部

批判的かつ選択的な展望である。これを行うにあたり、私たちの議論は、3つの重要な典拠によってインスピレーションを強く与えられている。1つ目はブレドラグ・マトヴェイェーヴィチの地中海を通過する言語学的旅。2つ目は、イエン・チェンバースの「ポストコロニアルな海」としての地中海をめぐる近年なされている理論形成。3つ目は、より一般的な言い方をすると、イタリアの「闘争的な地中海主義者」の文献、特に社会学者フランコ・カッサーノの批判的思想である。ここでの目的は、次のことを提唱することにある。このかなりゆるい（だがそうであるがゆえになお刺激的な）知の領域から浮かび上がってくる重要な政治的・文化的諸問題は、人文地理学者によっていっそう徹底的に取り組まれるよう勧められるべきではないのかということだ。

地中海に関する文献には顕著なことがある。それは、この海について書く大衆向けの物語とアカデミック／学術的な文献との間に、奇異なまでの（私たちの観点からすれば、問題含みでもある）連続性が存在するということである。これら2つの解釈領域は、実際のところ、非常に意味ありげなやり方で、互いに言及し合い、相互に影響を与え合っている。このような融合は、もちろんこの特定の研究対象にのみ限られるというわけではない。しかし、地中海においては、この相互の影響が、一種の（想像された）地勢図を生み出す方向へと翻訳される傾向がある。地中海はこの地勢図によって、あまりにも頻繁に、途方もないほどの空間的固定性と歴史的連続性によって特徴づけられた神話的空間として本質化されてしまうことになるのだ。

しかしながら、私たちはこう強く主張するつもりである。地中海は、その記述を長きに渡って「拘束」してきた（暗にあるいは明らかに）実証主義的また／あるいは歴史主義的な比喩やそれに関連する物語によって操られたレダクシオ・アド・ウナム (reductio ad unum)、つまり複雑な事実をただひとつの一元的な要素へと還元するようなことに、従順にしたがうようなものでは断じてないのだ、と。私たちはむしろ、地中海は「他なる空間」、他なる空間的比喩を探求するための肥沃な土壌であることを断言する。これは、単に地中海の境界や容器を探求するといったことでは些かもない。むしろそれは、声というものの他ならぬ多義性や複数性を取り戻すことのできるものなのだ。この声の多義性と複数性によってこそ、地中海は「数々のオルタナティブ・モダニティ」の経験にインスピレーションを与えてくれる計り知れないほど貴重な源泉になるのである。

その代わりに、地中海に関する文芸的要素とアカデミックな分析との融合のせいで、（まさしく、これらの言説編成のうわべだけの性質ゆえに）このトピックについて「純粋にアカデミックな」文献のわかりやすい地図を作成することはできない。あらゆる言説編成と同様に、地中海に関係する言説編成も、学術的考察や歴史的再構築によってと同時に、調査されずいる平凡な文句や存在論的な領野によっても支えられているのである。地中海についての大衆文学とアカデミックな著作の間の広範囲に渡るつながりを研究するというのは、本稿の目的をはるかに越えた仕事である。だから、以下の内容を決して地中海についての既存のアカデミックな文献の包括的な展望としては読むべきではない。むしろ、私たちの試みの一部として提出しようと思うのは、地理学的な遠地から地中海を再考しはじめるということであり、人類学者のマイケル・ハーツフェルドによって「地中海主義 (Mediterraneanism)」と定義されたもののあらゆる形態の基盤に横たわっている主要な修辭表現／物語のいくつかを簡潔に調査するということだ。

次のセクションでは、この本質主義的伝統の起源を探求し、地中海が「書かれ」、そして想像される際の非常に独自の地図学的方法を特に引き合いに出すことで、この課題に取り組むことにする。この課題はとりわけ、地中海の「発明」について省察することで追究されることになる。その際、数々のコロニアルまたポストコロニアルな物語と、それらに関係するいくつかの認識論に言及することになる。本稿の後半部分では、それとは逆に、この議論におけるいくつかの重要な不調和な声というものに焦点を当てるつもりである。そこでは、ことによると、あらゆる地中海主義の言説を克服するような方途を示し、ひとつの「地中海的オルタナティブ」を提供することになる。とりわけ、フランコ・カッサーノによって率いられた革新的学派であるイタリアの南の思想 (pensiero meridiano) というその輪郭がはっきりとはしていない「闘争的な」文献、そしてフランスとイタリアの地中海研究に対するアルベール・カミュの仕事の影響について取り組むつもりである。

最終的に私たちは、地中海に対する伝統的なヨーロッパ人文主義のまなごしに縛りつけられた知的装置を捨て去り、むしろチェンバースによる根ごぎにされた地理への呼びかけを受け入れるよう論じることになる。これは別様に言うなら、「数々の不可視の歴史」と、姿を見せては「ヨーロッパと地中海を多様なリズムへと移動させていく」展開途中の空間性

／地理を、「試験的に記録する」(Chambers, 2008: 18)ということである。手軽な地中海主義のどのような形態をも拒否し、**地中海から学ぼうとすること**、またその不安定ではあるがいみじくも近代的である数々の位相幾何学／地理から学ぼうとすることによって、私たちは地中海についての批判的思索を行うための新たな基盤を描いてみようと思う¹⁾。

II 地中海を書く

大衆向けの物語によって描かれる地中海と、想定上は純粋学問の「地中海空間」の間にある先ほど言及したような対話(そして収斂)によっては、(オリエンタリストの伝統にそって)あらゆる存在論的考察から解放された言説編成が助長されてしまうだけでなく、次のこともまた含意されている。それは、地中海の空間性をめぐるとのような研究も、この2つの領域を、同一の地中海的言説の2つの現れであるかのように、一緒に扱う必要があるということだ。まさしくそれゆえに、地中海への批判的な取り組みが緊急に必要とされるのである。というのは、地中海空間が概念化される際に動員されるイメージや表象の多くが、**今日もなお**積年の本質化された解釈を再現してしまう傾向にあるからだ(批判については、Jones, 2006参照)。マイケル・ハーツフェルド(Herzfeld, 1984, 1985)は、このような本質化を行う伝統を、「地中海主義」の一形態として定義してきた。ハーツフェルドはこの用語で、ひとつのはっきりとした言説編成を述べているが、これは地中海についてのある独自のビジョンに基づいて、またそれを通して表現されている。このビジョンによってこそ、地中海は統合された空間として——すなわち、ひとつの全体として、想定上の中心／核心によって動かされているものとして——も描かれるし、またその(前提とされた)自然的・文化的「裂け目」を本質化するような理解としても表現される。かいつまんで言うなら、この一連の言説は、多くの点で、オリエンタリズムの一形態に相当している。実際、こうした「主流」となっている地中海主義の支配的表現は、この2つの修辞表現の間で揺れ動く傾向があるのだ。一方では、地中海は自らの地質上また歴史上の長期持続(long durée)によって統合された、ある種の**すべてを包み込む空間**として表象される。この修辞表現は、地中海の「自然属性」としてしばしば提示されるものによって支えられている。つまり、大

西洋によって区切られ、また大西洋から隔てられた「閉じた海」としての独自性のことであり、要は一見したところでは、反芻不可能な地理的事実のことである。そして、このような「地理的明証性」は、しばしば「文化的明証性」によって補完される。これこそが、地中海の自然地理とひとつのはっきりとした文化的-歴史的軌道との間に必然的な結びつきを想像するヨーロッパの人文主義的伝統のもたらした産物に他ならない。このように議論がすすむにつれて、この自然と歴史の収斂は、世紀を重ねるうちに、唯一の比類なき「地中海アイデンティティ」というものを生み出してきた。このアイデンティティは、年月を経るなかで強化され、一連の特徴ある「地中海的景観」の内部に表現されているとされるのである。しかし、その一方で——これは2つ目の修辞表現である——、地中海は、コンフリクトを含んだ分断された空間として、「裂け目の地理(géographie de la fracture)」としても提示されている(Bromberger, 2007; Kayser, 1996)。この後者の修辞表現にはしばしば、この空間をいくぶん否定的なもの／問題のあるものとする読解が含意されているが、これは地中海の経済的、政治的、かつ／または社会的特徴を分析する文献において支配的なものとなっている(たとえば、ユーロ・地中海エリアの地域形成の現代的過程を分析する仕事がある。なかでも以下を参照。Bistolfi, 1995; La Parra and Fabre, 2005; Rizzi, 2004)。

これら地中海主義の言説は、様々な出所、様々な文化的起源や目的から来ている。しかしにもかかわらず、これらはあるビジョンを共有している。それは、暗黙裡に地図学的であるビジョンだ。この地図学的ビジョンを通して、地中海空間は潜在的に地図化可能であり、「完全なる」記述に対して開かれたものとして認知されているのだ。地中海を、安心をくれる地勢図空間に翻訳するということは——その自然・文化史への訴えを通してであろうと、もっと幻想から目覚めた(構築主義の)パースペクティブを通してであろうと——、イエン・チェンバース(Chambers 2008)によって「地域研究(area studies)の落ち着いた地理」と名づけられたものへと至ることになる。この地理の陳腐ではあるが厳格な地図学は、まさしくその空間を、そしてその社会的・文化的再生産を規律化するような認識論的枠組み、さらにはその政治的な管理運営を許容するものに他ならない²⁾。地中海を直線的な歴史の産物として、そして一定の「地理的事象」(たとえば地中海的景観)の容器として描写する言説編成と想像力によって、ひ

とつ政治的・文化的特質に対して、数多の重要な帰結がもたらされることになる。1つ目は、それらによって「地中海空間」を探求するあらゆる試みに対し、あらかじめ定められた一定の前提が押しつけられてしまうことである。こうして、別の、そしてオルタナティブな——とりわけ、別の（しばしば南側の）海岸によって／から考案された——読解は沈黙させられてしまう、あるいは周辺化なものとしてされてしまうのである³⁾。2つ目は、これらの言説編成と想像力が、地中海に何らかの永続性（「統合する」ものもあれば、「軋轢を生じさせる」ものもある）が存在するのを当然のこととみなすことである。それゆえに、地中海空間についてのどのような分析も、このような探求の根底に横たわっている存在論的立場を要なしで済ましてしまい（またときには無視してしまい）、主に地中海の永続性をめぐって想定された隠れた力=意味のできるだけ最良の表象を特定することに主眼を置いてしまうのである。こうして、地中海はそのアイデンティティを規定するいくつかの永続的な要素／過程が存在するということによって特徴づけられる空間として想像されるわけである。だが、これは事実上、地中海の過去と現在に関する独自の大きな物語、しばしばこの海の「位置」やその想定された文化的アイデンティティにとっての重要な（また唯一の）指示対象となる物語に寄り掛かってしまうということなのだ。

しかしながら、『地中海のいくつもの航海』のなかでチェンバース (Chambers, 2008: 5) によって注意されているように、地中海について——その過去・現在・未来について——書くということは、揺れ動く空間を通り抜けながら航海するというに他ならない。というのは、「概念としても、歴史的・文化的形成物としても、地中海は想像のレヴェルにおいて構築された「現実」だからである。別様に言ってみよう。地中海とは、連続的に移動していく欲望された対象と、いつも抑圧されたかたちの現実化との間でなされる政治的また詩的な節合のことなのである」(p. 10)。私たちが強く主張するのは、大衆の空想的イマジナリーとアカデミックな文献の間の収斂／融合は、地中海とその人々を、サバルタンの他者性の現れとして構築することによってこそ引き起こされているということなのだ。地中海がこのように構築されるのは、均質性と連続性という物語と、異質性と不連続性という物語を、交互に変えていくこの海の様々な（そして潜在的にコンフリクトを含んだ）表象の間の逆説的な相互作用によってなのである。こうしたコンフリクトと矛盾を含んだ物語は、

互いに浸透し合う傾向を有しているために、ひとつの地中海という文化空間の定義を、ただ逆説を含んだものにするだけでなく、不可能なものにさえしてしまうのだ。しかし——ヨーロッパの近代性によって生み出されたサバルタン空間、オリエント一般が他者として構築されることと比べるなら——、地中海主義の物語の創世を特徴づけ、それを他とは区別されたものにするのは、地中海と呼ばれる地理的対象が、想定上、客観的に存在するとされていることである。前述部分においてほのめかしているように、**定義される以前に、また定義の及ばないところで**、ア・プリオリに地中海が存在しているという観念は、その自然地理の「自然的明証性」を——あるいは一連の込み入った空間的な過程と理解を本質化また自然化する傾向のある解釈枠組みを——基盤としているのである⁴⁾。結局のところ、これこそがすべての地中海主義の暗黙の目的なのだ。つまり、一連の様々な変化する（ときどきは互いに争いさえする）表象を通して、**地中海と呼ばれるひとつの地理的対象**が存在しているという確信を保持するということだ。ここにおいて、地中海における様々な近似性のかたち（形態・気候・文化・宗教など）によって、ひとつの単純化された研究分野、また別の状況では、単一のイメージには還元することのできない研究分野をつくり出すことを通して、独自の修辞学的装置が正当化されることになるのである。

これにふさわしい一例を挙げるなら、フェルナン・ブローデルのよく知られた議論があろう。「人間の単位のコアにおいて、ひとつの強力な自然の一体性、すなわち風景と生活様式を統合するひとつの気候が作用していることはきわめて重要である……地中海という有機体がある中心において生活と気候が同じ調子のリズムを持っていることはやはり重要であり、その調子がきわめて特別なので「地中海的」という形容詞がふつう指し示すのは、まさにその生活と気候の調子なのである」(Braudel, 1972: 231 [2004: 384])。この解釈枠組みの内部でこそ、ブローデルの地中海人 (Mediterranean Man) ——気候と景観の共同作業がもたらす所産——が、典型的に地中海的とされる生活様式 (genres de vie) を生み出すのに寄与することになる。フランスの可能論、より一般的には、フランス地理学（とりわけ、ポール・ヴィダル・ドゥ・ラ・ブラージュとリュシアン・フェーヴルの仕事）の影響は、ブローデルによって、地中海についての彼の最高傑作の冒頭の諸ページのなかではっきりと説明されている (Braudel, 1972 [2004]: 17)。フランスの地理学者ポール・クラヴァ

ルは、ヴィダルの地理学に現れている地中海理解を分析するなかで、次のことを特筆している。「ヴィダル・ドゥ・ラ・ブラーシュのモデルを、最も首尾一貫して、最も独創的に採用することに成功したのは、地理学者ではなく、歴史学者であった。それは、フェルナン・ブローデルの著作『地中海』の最初の300ページだ」(Claval, 1988: 401)⁵⁾。地中海の表象の系譜学がフランス語でも⁶⁾(たとえば、Deprest, 2002; Fabre, 2000a: 43–47参照)ドイツ語でも(Meiering, 2000: 55–63; 75–82参照)歴史的に再構築されているが、その双方ともに、この海を自然と文化のレヴェルにおいて統合された均質的空間とする解釈を擁護する際には、地理学者たちによって果たされた役割を強調している。近年なされたいくつかの仕事は、なおもこの伝統を賞賛している。たとえば、ノーウィッチの『中海』(一種の反ブローデル流の地中海史)がその証拠となっているが、それは地中海空間の明らかなる一体性を力強く喚起するものである。

地中海は奇跡である。地中海を地図上で100万回目に見ると、私たちその存在を所与のものにしてしまう傾向がある。しかし、もし地中海を客観的に考察しようとするなら、突然次のことを理解するようになる。それは、文化の揺りかごとして、地表の他の部分とは異なった完全に唯一なる何かがあるということ、故意に設計されたと思われるような水の集まりが存在しているということだ(Norwich, 2006: 1)。

しかしながら、地中海の一体性と連続性という明々白々のパターンについての着想は、仮説上の地中海人(homo mediterraneus)に特有の不変で繰り返されるいくつかの特徴に関して、長年に及ぶ一連のありふれた文句や大衆向け物語を生み出してきた**源泉でもあり、それがもたらした帰結でもある**——それらはしばしば、過去のロマン主義文学や紀行文学から引き出されている。議論の余地があるとはいえ、このような物語が、本質化された(そして異国趣味化された)地中海的「類型」/主体、それに関係する一連の地中海的「雰囲気」が存在するという確信が広まることの基盤であろう(この2つのテーマは、現代の観光の文献にはっきりとみられる——Obrador et al., 2009参照)。そしてこの後者は、一種の前近代的かつ/または後期近代的な肉体的感覚の地平として賞賛されることになるが、これは記憶を静態的なかたちで地図作成することによってこそ引き起こされているわけなのだ。これとよく似たポイントが、

マトヴェイェーヴィチによって指摘されている。「地中海について語ろうとする者は地中海の持つ豊穡に苦しんだ……こういったモチーフから文学はありきたりの題材を余す所なく汲み出してきた。地中海で駆使されるレトリックは民主主義と衆愚政治、自由と専制政治、いずれの側にも手を貸すことになった……[それゆえに]いわゆる「美文調の言説」(太陽、海、砂浜など)は悪趣味なものに終わることがほとんどである」(Matvejevic, 1999: 12, 213[1997: 302])。

このオリエンタル化された物語の生産において重要な役割を果たしたのは、近代初期のフランスとイギリスの旅行者たちだ。彼らは地中海を「古代文明の、また同時に飼いならされていない自然の崇高な過剰さの」(Chambers, 2008: 33)基底としてしばしば描写していた。実際、私たちは少なくとも19世紀以来、「北ヨーロッパから到来した文化的まなざしによって圧倒的に確立された観念の内部で」(p. 33)、地中海を思考することに慣れてしまっている。地中海は、グランドツアーの特権的な目的地であった——しかも、(ブローデルをまねて)「オリーブの木が茂る」場所で旅をはじめめるポール・セロー(Theroux, 1996)のような現代の旅行者-記者たちの視線のなかでは、地中海は今日でもまだ依然としてこのままなのである。その旅は、カタルーニャ、プロヴァンス、コートダジュール、さらにイタリアに進み、ヨーロッパ地中海の残りの部分、そして最終的には中東/レヴァントへと至るのだ(Chard, 1999; Roth, 2004; Tinguely, 2000)⁷⁾。

こうした(地中海の一体性や連続性に関する要素を特定しようという隠れた秘密裏の試みからしばしば成り立っている)文献の多く特徴として、ノスタルジックな黄金時代を喚起するということがある。ただし、それは現在のなかにこれらと同じ要素を論証することができないという目下の力量不足を如実に物語っているわけであるし、また同時に、現代地中海の関心事についての思索を過去の問題をめぐるものへとゆがめてしまう傾向を有している。しかし、ブローデル(Braudel, 1972[2004]: 168–170)を呼び戻しながら、チェンバースは次のことを思い出させてくれる。「地中海の限界を特定しようとする地政学的定義の最も総括的なもの(有名であるが、南にはヤシの限界線、北にはオリーブ栽培)でさえ、自らの基準が、外部へとうねっていく歴史的波動や文化的流動によって押しのけられてしまうものであることはわかっているのだ。その波動、流動は、バルト海のほうへ、東はレヴァントへ向かって、さら

にはその彼方へ、西は大西洋のほうへ、南は北アフリカを越えて、アフリカ大陸のサハラ以南の地域のほうへとうねっていく」(Chambers, 2008: 39)。しかしながら、北のまなごしによって規律化されている地中海の希薄化されたイメージによって、チェンバース(そしていくらかは、マトヴェイエーヴィチ)の言うところの、消え去ることを拒んでいる一連の問題が暴露され打ち明けられることがある。もし美学化された地中海的伝統といった安心を与えるような修辞表現が破棄され、地中海が繰り広げるいくつものモダニティの社会的・経済的・政治的・文化的特徴にまなごしを向けるならば、このような平静で落ち着いたイメージは、まさしく私たちの眼前において崩れることになるのだ。

III 地中海を発明する

ブルゲたち(Bourguet et al., 1998)によって「地中海の科学的発明」と名づけられている物事について言えば、次のことは広く受け入れられている。この発明が主に18世紀、19世紀に遡るものであるということ、そしてナポレオンのエジプト遠征に、唯一の「観察可能」な地中海文化という観念を続く数十年の間に確立する助けとなった決定的な契機を見出していることである(Laurens, 2007)。チェンバースによると、研究対象としての地中海は、基本的に近代の地理的・政治的・文化的・歴史的分類のもたらした産物である。それは「言語学的には19世紀にヨーロッパの語彙のなかに入り、ふさわしい名称を得た構築物であり概念なのである」(Chambers, 2008: 12)。ティエリ・ファブル(Fabre, 2000a, 2004)は、フランスでの地中海の表象の系譜学に関する著作のなかで、近代において地中海が再発明される重要な出発地点を、エジプト遠征に、さらには北アフリカでのフランス植民地主義の新たな時代の幕開けのなかに特定している。ファブルはしかし、18世紀の旅行者-哲学者(voyageurs philosophes)たちによって果たされた役割を完全に見落としている(Bourguet and Licoppe, 1997)。彼らは、ヨーロッパ文明のギリシャ的起源を探求しようとして、地中海に関する独自のオリエンタリスト的イマジナリーを生産する上で多大な影響力を与えていたのだ⁹⁾。

ギリシャ——また特には、古代と近代のギリシャの関係についての——研究は、ヨーロッパの近代性のある局面(特にナポレオン遠征以後)において、すべての地中海主義が必ずよりかかることにな

るアポリアを生み出し広めるにあたり、キーとなる要素となっている。「古典」ギリシャの出現は、伝統的には、ヨーロッパとアジアの間の文化抗争における決定的な契機として提示されてきた(Malkin, 2004参照)。しかしにもかかわらず、地中海主義の数々の物語によって、ヨーロッパ文明の生誕地とみなされたがゆえに、ギリシャ・イタリア社会の「深い」性質に大きく焦点が当られる一方で、アジアとアフリカの海岸にいた「ギリシャ人」がどれほど無視される傾向にあるのかを、ジョアン・デ・ピナ-カブラル(Pina-Cabral, 1989)は示している。最近の本のなかで、トーマス・ギャラント(Gallant, 2002)は、ギリシャ・イオニア諸島の植民地占領期間の間のイギリス支配層のイマジナリーの展開を遡って調べている。ギャラントは、支配層自身の実際のギリシャ経験と古典主義/ヘレニズム文化のイマジナリーとの間にあった不一致のせいで、過去のコロニアルな経験に由来する修辞表現を、彼らがどのように借用するに至ったのかを注意深く観察している。たとえばそれは、地元の人々を「ヨーロッパの先住民」あるいは「地中海のアイルランド人」として表象することによって行われた。地中海における文化的また文明の諸境界がたえず修正されるメカニズムについては、スザンヌ・サイドの分析のなかで光を当てられている。彼女は、古代と近代のギリシャの間の途切れることのない連続性が、ヨーロッパによって発明されたことに関して分析を行っている。そこでは、18世紀の旅行者たちによって、現代のギリシャ人に属すると考えられた(特に、彼らの先祖たちに想定された市民的・軍事的美徳と比べてときの)数々の悪徳——好色、怠惰、裏切り、臆病、卑屈根性、窃盗と詐欺の性向——は、しだいに「オリエンタ化」されていき、「生来の」ギリシャ人気質というよりは、むしろオスマン帝国の影響のせいにされてしまうのであった¹⁰⁾。19世紀になるとロマン主義的な表現が用いられるようになることで、ヨーロッパの旅行者たちの物語にある根源的な変化がみられるようになる。つまり、(輝かしいギリシャの過去と比べて)退廃と墮落を強調する記述が、「いつも肯定的で、ときにはほとんど偶像崇拜的なイメージや平凡な文句の「レパトリー」」(Saïd, 2005: 271)に徐々に取って代わられるようになるのである。これらの「レパトリー」によってこそ、ギリシャ人たちは「歴史の流れに奇跡的に危害を加えられずに、近代文明の侵入によって汚染されずに……生きている先住民祖先へと変形された」(p. 269)存在として提示されることになるのだ。こうして、ギリシャ人に対するヨーロッ

パの道徳的判断を規律化している諸々のカテゴリーが、真に翻訳されるわけである。つまり、ギリシヤ人は犠牲者と位置づけられると同時に、古代ギリシヤの偉大なる過去の相続人として位置づけられる(Guthenke, 2008; Roessel, 2002)が、その一方で、オスマン帝国の支配者たちには——「東洋人」——罪と非難の領域があてがわれることになるのだ。

これらの比喩は、無害なものなどではなく、数々の結末を伴ったものである。もし古代ギリシヤの特徴をもつ残存物が博物館の作品とされるのならば、それらは腐敗をもたらす影響からは保護されなければならないし、ついには元通りに復元されなければならない。それゆえに、ヨーロッパの旅行者たちは、純粋な古代ギリシヤ性の貴重な残存物さえをも「汚染」してしまう外国の血によるいかなる文化変容または混合に対しても、厳しい批判を行うのである(Said, 2005: 280-281)。

こうして、田園的で牧歌的で、まだ近代的ではない世界としての地中海の表象は、「辱めの政治」を支えるものになってしまうのである(Herzfeld, 2005: 59-63)。それゆえに、地中海は、ヨーロッパの支配力の起源にもなるし、その現代の舞台にもなるというわけなのだ。これは、チェンバースによって述べられている通りだ。「この歴史のなかでは、他性を客体化することと、世界の残余を…文明化する使命なるものによって織り合わせられた編目のなかで、地中海は停止させられてしまうことになる。この枠組みの内部では、地中海は美的・文化的基準へと改変されてしまうのである。まさにこの「後進性」と差異とによって、古代・汚されていない自然・手つかずの起源からなる失われた世界を写し出す鏡が、近代ヨーロッパへとかざされることになるのだ」(Chambers, 2008: 12-13)。こうして、小説的な地中海主義の文献と、ハーツフェルドによって烙印を捺されたアカデミックな文献(主に人類学)の間の暗黙ではあるが効果的な対話が確立されることになる。これについては、地中海の男らしさに関する数々のステレオタイプや、地中海についての同性愛幻想が生産される際にそれらが果たしている中心的な役割を思い起こせばすぐにわかるだろう——この幻想は、他性と違反の空間としての地中海という長く続いているコネクション(Aldrich, 1993参照; 小説的記述については、Aciman, 2008参照)にも寄与するし、「名誉と恥」に関するジェンダー化された記述を中心に据えた地中海人についてのゆるぎなく定着している人類学の

文献(Gilmore, 1991)にも寄与している。

この均質性と他性との間の奇妙な弁証法(すでに言及したように、これは地中海の近代的・植民地的な概念形成の起源にあるものだ)は、数多くの現代の表象のなかに再び出現している。ヨーロッパ連合(EU)と地中海の間で形成される、制度レベルの様々な関係性のなかでも(Bistolfi, 1995)、またそれに関係するアカデミックな文献のなかでも、地中海は、多くの分野で西洋的「基準」を欠いた、遅れた近代化の空間として、然らずば、グローバル秩序への潜在的な脅威としてさえ(これは特に、テロリズムと(イン)セキュリティの諸問題に焦点を当てた国際関係論の仕事において明らかである)表象される傾向がある。イスラームとヨーロッパの間に関係性に関する9.11以後の議論は、数多のやり方で、現実上・想像上の文明の衝突の舞台としての地中海のイメージを蘇らせてきた(し、それに正当性を付与してきた)。これは、過去の数世紀の間ずっと、危機の時代においては、ある程度規則的に表面に姿を表してきたイメージだ。

ただし、ヨーロッパ統合の過程が、地中海の内的境界をあらためて「移動させる」のに役立ってきたことに言及しておくことも重要だろう。今ではあるゆる点において、ギリシヤ、イタリア、スペインは、「西洋」クラブの正規メンバーとして受け入れられていて、もはや——わずかというわけではないが、「恥と名誉」の概念に焦点を当てているアメリカの人類学の文献におけるような(Gilmore, 1987参照)——オリエンタリスト的想像力の対象ではないのである。他性と(下位の)他性の「影線」は、明らかにより南へと移動してきたし、またそれゆえに、ますます西洋とイスラーム世界の「想定された」対決によって特徴づけられることになっている。こうした事態に応じて、地中海空間の現代表象は、おびたしいまでに列挙される様々な過程と表現を含むようになっていく。それはムスリム世界と民主主義との関係性から、ジェンダーと人権の問題、経済的後進性と制度上の腐敗というイメージ、人口爆発と南北両岸の間の不法移民の影響にまで及んでいる¹⁰⁾。

こうであるにもかかわらず、私たちの議論にとってひときわ興味深いのは、次の事実なのだ。それは、たとえ明らかなコンフリクトを含んだものではないとしても、地中海空間の異質性にあふれた性質を強調する表象が、多くの場合、地中海の「均質的」な要素についての思索に縛りつけられることになってしまう方途だ。「均質的」な要素というのは、出現する緊張関係を緩和するのを助けられるとされる共通性

と連続性の要素のことである。これは地中海を統合する原理が存在するという信念であろう。しかしここにおいては、この信念は自然環境と生活様式間の自然発生的な収斂（だんだんと「裂けていく」地理の出現によって抹消されてしまう収斂だ）という観点から理解されるのではなく、むしろ自覚的なプロジェクト、人工的な構築の結果として、つまりユーロ・地中海というマクロ地域の実現をねらった一連の「地中海政策」の所産として想像されているのだ。

最近の論文において、アルン・ジョーンズ(Jones, 2006: 420)によってなされた批判的分析は、どのようにして「1960年以来、地中海はヨーロッパの最も問題を含んだ横腹としての配役を割り当てられてきたのか」を示している。その分析は、地中海空間を管理統制しようというEUの試みを含んだものである。このEUの試みは、次の3つの鍵となる柱に基づいて体系化されている。1つ目の柱は、「人権と民主主義の尊重に基づいた平和と安定がもたらす共通のユーロ・地中海地域（政治上・安全保障上の提携）」を確立すること。2つ目の柱は、「EU圏と地中海の協力諸国の間、また地中海の協力諸国の間で、自由貿易エリアを漸進的に確立することを通して、共有された繁栄地域」を創出すること。3つ目は、「自由で活発な市民社会を発展させることに加えて、地中海地域の文化間のよりいっそうの理解と人々の親交」を促進することである（p. 420）。それゆえにそれ以降は、EUのほとんどの地中海政策が、この「激しく争われ粉砕された地政学空間」(p. 420)の長期的な政治的・経済的安定のために必要な諸条件を実現することに焦点が当てられてきた。この観点に立つなら、「ユーロ地中海」空間というアイデアは、継続する地中海主義の伝統と密接に結びつきながら、地中海南岸を正真正銘ヨーロッパ化するプロジェクト（Jones and Clark, 2008）として解釈することができるのだ。実際のところ、バルセロナ・プロセスにアラブ人のエリートたちが吸収されることで（Pace, 2005）、20世紀初頭のエジプトにおいて、様々な政治的党派の間でなされた類似の議論が、そっくりそのまま繰り返されているわけなのである¹¹⁾(Al-Kharrat and Affi, 2000)。

こうした想像力に反映されているのは、またしても、その経済的・政治的・文化的諸過程の不確かな異質性の彼方で、「自然に存在する」歴史的・地理的な連続性へと「回帰」することができる空間として了解された、地中海の本質化された理解に他ならない。ユーロ・地中海の協働に関する最近の仕事は、数多の点で、この観念を再現してしまっている。たとえ

ば、ミシェル・ペースの『地域アイデンティティの政治』は、地中海を全体論的に読解する可能性についての変わることはない永遠不変の問いとともに、この空間の「地域的」特質についての省察を開始している——（いくつかの下位地域から構成される）ひとつの「地域」として地中海を考えるべきか、それともいくつかの異なった地域の間「接触面」として考えるべきなのか（Pace, 2005: 1）？ もちろん、このジレンマがもたらす実際の政策への影響は甚大なものである。しかし、この「地域」をめぐる議論は、現代の数多くの歴史記述を駆り立てているものでもある。このなかには、ホーデンとパセルによる『退廃する海』も含まれるが、この本は地中海における様々な出来事の歴史としても、地中海の歴史としても——つまり、この海全体としての歴史と、地中海という「地域」へまると言及することなくしては理解不可能な出来事の歴史——提出されているのである（Horden and Purcell, 2000: 2-3, 9）。

しかしながら、これらのアプローチによって見落とされがちなのは、地中海がその定義上、「ポストコロニアルな海」——すなわち、地中海が「出会いと流れが錯綜する場」（Chambers, 2008: 32）——であるという事実以外の何ものでもない。そこにおいては、「地中海という複雑な地政学的・文化的・歴史的空間が、私たちの注意を、数多の文化的横断・混合・クレオール化・不均等な歴史的記憶といった問題に集中させるのだ」（p. 28）。地中海は、「狭量な進歩や均質なモダニティといった陸に封じられた欲望によって規律化された単一の地図化のもたらす容易い評価を、中断してしまうと同時に、それを問いただすような多数性を提出する」空間なのだ（p. 25）。それとはまったく逆に、裂け目の地中海主義（*mediterraneisme de la fracture*）は、一連の本質化された理解に依拠し、実体において変化することのない何か——多くの点で、オリエンタリストの植民地支配のレトリックやロマン主義の文献のなかで想像され、賞賛されている文化的「容器」というものによく似たビジョン——として、地中海の「概要」を提示してしまうという傾向を有しているわけである。

ここにおいて私たちが論じたいと思うのは、以下のことである。それは、地中海の全体論的な読解を受け入れている物語も、コンフリクトによって駆動された異質性にあふれた空間という観念を支持する物語も、西洋近代の地理と比べ、この空間を「他なる」何かとしてしまうような解釈の内側に吸収される傾向があるということだ。この傾向にそうならば、地中海は、ヨーロッパの文化・政治・経済の制度的枠

組みを強要することによって、植民地化／近代化することができる空間、また異国趣味と空想によって特徴づけられたオリエンタル化された領域として、植民地化／保存することのできる空間以外の何ものでもないのである。

IV 地中海的オルタナティブ

1 地中海主義の限界

私たちが前述部分で提出しているように、地中海主義のどのような形態も、完全に記述されうる——そして、その境界を何らかの方法を描くことができる——「地中海」と呼ばれる「現実のモノ」が存在しているという信念に依拠している。そして、このような地勢図的理解によって生み出される空間的「容器」は、安定した、あるいはコンフリクトを含んだ経済・政治・文化地理でみたされることになるわけである。私たちはしかしながら、広く共有されるような地中海の境界を定義するのが（不可能でないにしても）どれほど困難なことであるのかについては特に言及してきた。マトヴェイエヴィチが明敏に論じるように、「その海岸は海の境界に過ぎず、地中海の境界ではないのである」(Matvejevic, 1999: 17)。定義上、地中海における境界は、可動的で不確実であり、地図学的投影という着想よりも、「地平」という着想に近いものだ。実際のところ、これら諸々の境界を現に経験することによって、あらゆる地勢図的アプローチに内在しているすべての限界や矛盾が暴露されてしまうのである。地中海の「文化的闕」は、定義というものを免れている。定義のために、その文化地理の安定した「有機的」地図を描こうとするどのような試みも、不可避免的に失敗を運命づけられているのだ (Chambers, 2008; Magris, 1987; Matvejevic, 1999[1997]; Minca, 2003参照)。

にもかかわらず、ここでの私たちのポイントが、解釈カテゴリーとしての地中海を、十はひとかけらに拒否してしまうことへと、必ずしも翻訳されるというわけではない。むしろ完全に逆なのだ。私たちが好もうと好まいと、地中海は、言説として、あるいはプロジェクトとして、いつも私たちと共にあるのだ。地中海の数々の実践と想像力によって、地中海自体が、移動性と接触の具体的空間として課されているのであり、他者性をめぐる多種多様な知覚が寄せ集められ、結び合わされる現実的また比喩的な空間として課されているのである。その分割と裂

け目、観光用のキッシュと感傷的な歴史主義、ましてや(英語圏の?)西洋地政学のグランド・デザインからの明らかな周辺化、確固たる固定された境界のうちに「取り囲む」ことの不可能性。これらの制約のすべてにもかかわらず、地中海の数々の沿岸から、その封じ込め不可能な流動性を経験することを通じて、自らを定義することを学ぼうとする人々にとって、地中海は重要な指示対象であり続けているのだ。

実際に現存する地中海の数々のオルタナティブ・モダニティの可能性について省察をはじめめるために、私たちはプレドラグ・マトヴェイエヴィチへと戻ることにした。彼の仕事は、この海の数々の地図学に取り組んでもいるし、その神話的な地平にも取り組んでいる。マトヴェイエヴィチはこう論じる。地中海は、「あまり狭い尺度を認めない」(Matvejevic, 1999:11[1997: 27])。これを別様に言ってみれば、地中海を私たちの分析上のカテゴリーへ還元しようとするどのような試みも、失敗することが運命づけられているということ、さらにひどいことには、既存のカテゴリーのなかに封じ込めてしまうことができないがゆえに、**地中海などまったく存在しないのではないか**という疑念を引き起こしてしまうということである。しかし——マトヴェイエヴィチにしたがって——、私たちが論じようと思うのは、地中海を測るたったひとつの尺度などは断じて存在しない(また存在することはできない)ということである。地中海を航海しながら選択される定義やルートというのは、**私たちが出発する海岸、そして私たちがしようと決める航海それ自体に完全に懸かっているのだ。**

まず、出発点を決めることで、地中海の旅をはじめよう。海岸あるいはその情景、港あるいはそこで起こる出来事、航海あるいはその物語などが、出発点として挙げられる。だが結局は、出発点は到達点ほど重要ではないし、そこで私たちが何をいかに見たのかということよりも重要ではない(Matvejevic, 1999: 7)。

地中海はその現実上・想像上の航海の経験がもたらす産物なのであるが、近代地図学は、地中海を抽象的コードへと、二次元の普遍性を与えられた描写へと翻訳しようとしてきた。マルコ・アントンシチ (Antonsich, 1998: 100) が示唆するように、地中海を閉じた安定したカテゴリーの内側で本質化しようとするこうした試みは、些かも無垢なものなどではないのである。それはこの海の文化的複雑性を、単純

で秩序化された図式に還元すること目論む、その本質において地政学的なものとして理解されるべきなのだ。これとよく似た議論が、デ・ピナーカブラルによってもなされている。彼は「文化地域」としての地中海水盆という観念は、この地域を特徴づける様々な文化的均質性と差異を理解する方法としてよりも……むしろ、英米の研究者たちを、彼らの研究対象の人々から遠ざける手段として役立っている」(de Pina-Cabral, 1989: 399)と記している。

ハーツフェルドによると、「地中海的である」ということは、どれほどその意味論的積み荷が移り気なものであろうとも、そこに様々に含まれている重さを欠いてしまうというわけではない。こうした意味の権力は、地中海を伝統的にテロリスト国家・マフィア・「道徳のない家族主義(amoral familism)」の地域としているが、これらの特徴のすべてが、身代わりの宿命論の基盤として結び合わされるのである。この権力からすれば、攻撃的な短気さと、怠惰さによる不関与といった2つの要素は、温情主義的で抑圧的な反応に正当性を与えてしまう特徴、要は地中海に固有のものとして想定されている特徴の「証左」に他ならないのである(Herzfeld, 2005: 60)。したがって、(つまりは、本流の西洋近代とその地図学的論理からの)「地中海的流浪」としてしばしば定義されているものは、一方では、西洋的知を生産し普遍化する際に、地中海の役割を全般において低下させる(あるいは消失させもする)ことへと翻訳されるわけであるが、他方では、一種の前近代の残余として、あるいはグローバル化された近代化の形態に抗するローカルな反応として、「地中海的経験」を発見する反動的な地中海主義の新たな形態へと翻訳されてしまうことになるのである。チェンバース(2008: 14)によって論じられているように、「考古学のうわべの中立性、古典研究、そして地理学・人類学・歴史編纂学といった近代的学問分野は、発見や復興といった意図的な行動のなかで、地中海の現代的意味を、ヨーロッパの不可欠の部分として照合してきた。このような「専門家の言説」——この言説における経済的・政治的・文化的権力のなかの差異は、「情報」の「中立的」な統語法の内部で平らに引き伸ばされている」(p. 142)——こそが、(チェンバースによって「地中海の流動的な物質性」と述べられている - p. 5)「地中海性」の他ならぬ多孔性と(翻訳という見地から見ても、通過=乗り継ぎという見地から見ても)その不可避的に移り変わりゆく性質を封じ込める(そして等閑視する)ひとつの方法となるのだ。私たちは、この移り変わる不安定な地理を取り戻すため

に、イタリアの社会学者フランコ・カッサーノの呼びかけ、つまり「モダニティという見地から南について思考する」のを止め、「むしろ南の見地からモダニティを再考すること」[に着手しよう](Cassano, 2000a)という呼びかけに注意を向けることにする。ゆえに次のセクションでは、「地中海的オルタナティブ」というアイディアに献身するますます重要性を増している研究領域の文化的・政治的影響について焦点を当てる。

2 闘争的な地中海主義

近年、「オルタナティブ」な地中海的モダニティという考えが、フランス¹²⁾(Balta, 2000; Fabre, 2000a, 2007; Fabre and Sant Cassia, 2007; La Parra and Fabre, 2005; Latouche, 1999¹³⁾)とイタリア(Barcellona and Ciaramelli, 2006; Cassano, 1996 [2006], 2000a, 2000b; Cassano and Zolo, 2007; Goffredo, 2000; Guarracino, 2007; Prete, 2008)の両国において、重要な論争的となっていた。これらの議論は、地中海主義のすべてが有する「深い起源」なるものにその主眼を置いてきた。その起源とはつまり、オリエンタリストの伝統と調和し、地中海を植民地化し、周辺化させる美学化された物語のことである。たとえば、フランコ・カッサーノ(Cassano 2000a)はこう提唱してきた。地中海のモダニティとその文化的表現は、認知のレヴェルにおいて西洋の本流から周辺化されてきたが、それこそがまさに地中海を戦略的に「忘却」すること——しかしまた、英語圏のプロテスタントの倫理と合理性、そしてその普遍化への自負によるままに支配されることで、西洋文化が次第に衰えてきたこと——の主要な原因のひとつなのであると。カッサーノは、近代的なものの題目から地中海的パースペクティブがはっきりと「追放」されることによって、次のような事態が引き起こされてきたと論じる。それは、カッサーノによって「適度(il ragionevole)」と名づけられているものが失われてしまい、地中海を単純に「後進的空間」へ、まだ近代的でない地理へと還元してしまうと同時に、大西洋・北ヨーロッパのビジョンによって課された空間的容器のなかに地中海を収容してしまう一連のカテゴリーが押しつけられるという事態である。このビジョンは、最善でも地中海を余暇の領域(前近代的あるいは反近代的でさえもある特質の内部に力づくで凍結された空間)としてみなすだけであり、最悪の場合は、遠く離れたところにいる他のアクターや利害をめぐる地政学的闘争の領野としてみなしてしまうのである。

したがって、地中海に関する様々な決定は、多くの場合、地中海から遠く離れたところで——そしてたびたび地中海なしで——行われているというわけだ。コレージュ・ドゥ・フランスでの講義のひとコマのなかで、マトヴェイェーヴィチ (Matvejevic, 1998: 26) によって強調されたように、こうした事態こそが、失望と憤慨を生み出すのである。カッサーノ (Cassano, 2000a: 10) によって論じられているのは、地中海をめぐるこうした表象の一式は、「近代的なものとは比べたときの、否定的な差異という観点から見た場合にのみ存在するに過ぎないということだ。これらの表象は、まだ近代に達していないとされた領域のなかに、近代性への移行という永遠に続く中間状態のなかに置かれてしまっているのである」。まさしくこれこそが、ハーツフェルド (Herzfeld, 2005: 59) が「辱めの政治」という言葉でいわんとし、地中海主義のステレオタイプが持続することでもたらされた主要な帰結として特定しているものに他ならない。これは、カッサーノによっても同様に受け入れられている見方である。「他者のまなざしが支配的になるとき、漸進的な「分解」の過程が生じる。つまりそれは、自己破壊の過程であり、あなたが自分のことを誤植のようにみなしはじめる過程である」(Cassano, 2000a: 10)。(カッサーノによって、また前述のフランス学派によっても支持されている類の)「闘争的な地中海主義」の目的とは、ひとつに収斂していくとはいえその内部に存在する多様な「まなざし」に妨げられずに、地中海の数々の歴史と地理を批判的に——ときには根源的にさえ——考え直すことを通して、地中海の一体性を再考するということなのだ。この作業に賭けられているのは、地中海のどのような物象化をも克服しようという試みなのである。またそれは、本流となっている西洋の近代性についての理解、つまり、近代性を普遍的ですべてを包含する経験とする理解によって生み出された周辺性と他性の物語に駆動された均質的空間へ、地中海を還元することに打ち勝とうとすることでもあるのだ。ダニーロ・ゾーロは、次のように説明する。「ここで言われる**一体性**は、文化的な均一性や一神教に相当するわけではない。それは逆に、それは地中海の文化的「多^{フルリヴァーヌ}方面世界」の内部へ、アラブ・イスラーム文明を包摂することを伴うもの [でもあるの] だ」(Zolo, 2007: 18)。この批判的態度は、チェンバースによってそのまま繰り返されている。それは彼が次のように論じるときだ。「場所の感覚、所属の感覚——地中海の感覚——をつくり上げることに、少なくとも、内部と外部の間、

一方のなじみのある眺めからなる耕作された場所と、他方の外部世界の奇妙さと不安の間に、境界と限界を刻むことが必ず伴っている。[それなのに]外国のもの・抑圧されたもの・無意識的なものが、国内のなじみのある空間にまんまと浸透しようとしているのだ。そう、扉は多孔的なのだ」(Chambers, 2008: 41–42)。

「闘争的な地中海主義」は、私たちに地中海のいつも変わらなく存在してきた多義性を受け入れるよう強いる。それは、これらの多義性を、私たちの中心に位置する地中海(と近代性)の表象と対置させることによって行われることになる。この伝統の内部にいる著者たちは、こう論じている。地中海に関する／の批判的言説を可能とするには、その内部で近代の地中海が生まれ、また大衆化されていった、植民地的でオリエンタリスト的なイマジナリーと交戦することが必要不可欠なのであると。この文献によって、新しい見地で、別のパースパクティブにしたがって、地中海を再考しはじめられるような斬新な理論装置が提供されていることに疑念の余地はない。しかしながら、それは最終的には、文学的で美学化されている地中海主義にこれまで関連してきたはずの主要な形象のいくつか(かなり問題のあるやり方で)頻繁に寄りかかってしまうことになるのだ。

実際、「闘争的な地中海主義」の文献のなかには、想定された北の厳格な合理性に、「南の思想」(Cassano, 1996[2006], 2000a)を対置することで、地中海それ自体を本質化するリスクを冒してしまっているものがある。この流儀の特徴として、地中海主義のあらゆる形態への批判というものがある。確かにそれは見事に確立されてはいるのだが、前述部分で引用した文献のいくつかは、自律的とされるひとつの文化的主体や政治的課題を中心に置いた「他なる空間」として、しばしば地中海を物象化し続けてしまっている。一方では、カッサーノやゴッフレードのような著者たちは、地中海のあらゆる一枚岩的な定義を拒否している。それは、地中海をサルタン的存在として想像してしまう定義、またその複雑で混成的な性質やいつも不完全で不安定な(そしてときには衝突する)主体性を消去してしまうような定義である。しかし他方では、この文献によって多くの場合に当然視されている北と南の間、想定されている地中海的「適度」と北部ヨーロッパ的合理性との間のラディカルなイデオロギー上の対立によって、表には現れ出現しない地中海主義の新たな形態が潜在的には導き出されてしまっているのだ。

カッサーノとゾーロは、地中海をひとつの「オル

タナティブ」な空間／プロジェクトとして提示することによって——彼らの草分け的な著書『地中海のオルタナティブ』のタイトルが示すように——、文化を均質化する潜在的な空間を示唆してしまっている¹⁴⁾。もし別の場合であれば、地中海を構成する声の多数性・複雑性・複数性を彼らが強調しているのは歓迎すべきことなのであるが、それが「政治的オルタナティブ」という観点から枠づけられるときには、オクシデンタリズムの新たな形態を生み出し、さらに別の本質化された（たとえ洗練されていようとも）イメージのなかへ地中海を凍結させてしまう危険を冒してしまっているのだ。フランスのアプローチ (Fabre, 2000b; 2007参照) とイタリアのアプローチ (Cassano, 1996[2006]: 81–108; Zolo, 2007: 13–14参照) の双方のなかで、アルベール・カミュの作品に与えられている役割が示唆的であるのは、まさにこの意味においてなのである。次のセクションで私たちは、カミュの「正午の思想」(1951年の『反抗的人間』の最終章に最も明確に表現されている) が、ティエリ・ファール(と、そのタイトルがカミュから直接引き出されているファールの編集する雑誌)の仕事と、イタリアにおける南の思想の指導的理論家フランコ・カッサーノの仕事の両方に影響を与えてきた方途を問いたすことにしたい。

3 アルベール・カミュ——「正午の思想」と地中海(主義)の多義性

カミュの「正午の思想」(Chabot, 2002; Mattéi, 2008)は、次のような幅の広い伝統の一部に属している。それは、地中海の「並行的」読解、また地中海研究の植民地的系譜学へのオルタナティブを、多くの方法で提供している伝統である。数多くのユートピア主義思想家によって刺激を受け、さらにはサン・シモンの考えに強く影響を受けている(総合的な議論については、Heffernan, 1999参照; Temine, 2002もまた参照)この伝統は、当初はいわゆる「アルジェ学派」の内部で強化されるようになったものである(Talbayev, 2007)。その後、この伝統は、ジャン・バラールによって創刊され、1925年から1969年までマルセイユで発刊されていた雑誌『カイエ・デュ・シュッド (Cahiers du Sud)』(特に1943年に出版されたもの)の経験と交差することになる(Freixe, 2002; Paire, 1993)。この文芸作品は、地中海の概念化を行い提案しているが、それは地中海を「ラテン性」の空間として特徴づけた理解、つまり1930年

代のヨーロッパの全体主義的・権威主義的サークルのなかで広まった理解とは、はっきりと対立するものだ。ちなみに、後者のような地中海のビジョンは、イタリアのファシスト体制によって強固に支持されたものである (Fogu, 2008; Nelis, 2007; Rodogno, 2003) が、ルイ・ベルトランやシャルル・モーラスのようなフランスの同調者の多くによっても支持されていた (Fabre, 2000a; Lindenberg, 2000)。

1937年2月にアルジェの「文化の家」での開会の講演「土着の文化、新しい地中海文化」のなかで、実際、カミュは力を込めて次のように論じている。

地中海はそれとは別です。それはローマやラテン的天分の否定でさえあるのです。生きものであるそれは、抽象化など必要としないのです……われわれが地中海のなかで復権するのは、理屈や抽象化の趣味ではないのです。そうではなくて、それは、その生命であり——並木の散歩道や糸杉や唐辛子の列であり——アイスキュロスであってエウリピデスでなく、ドーリアのアポロンの神々であってヴァチカンのさまざまな模倣ではありません (Camus, 1967: 190–191[1972: 248–249])。

カミュは『反抗的人間』のなかでも、よく似た議論を提出している。

だが世界の青春は、いつも同じ海辺の周囲にある。美も友情も奪われ、最も誇り高い民族が減びつつあるいとわしいヨーロッパに投げ込まれながら、われわれ地中海人は、つねに同じ光線の下で生きている。ヨーロッパの深夜にあって、太陽の思想と両面を持った文明は、その夜明けを待っている。だがすでに真の支配への道を、太陽が照らしている (Camus, 1953: 267[1973: 273])。

フランスとイタリアの「闘争的な地中海主義者たち」は、地中海の「節度」と「適度」を賞賛しているが、その際には多くの点で『反抗的人間』の結論をそっくりそのまま繰り返しているというわけだ (Camus, 1953[1973]: 246–268)。また、カミュの「地中海主義」は、反権威主義的であるが、当時このような声がかくれただけしか存在しなかったというわけではないと言及しておくのも重要であろう。たとえば、古代ローマの権力観念を、ギリシャの人文主義的伝統と比較していたシモーヌ・ヴェイユの仕事を思い出すことができる (Weil, 1960[1998])。

このようであるにもかかわらず、カミュの地中海

のビジョン（と彼の知的環境のもたらす地中海のビジョン）に、両義性がないわけではない。ここでカミュの仕事とフランス帝国主義との間の関係を取り巻く広範囲に渡る論争——『文化と帝国主義』のなかでエドワード・サイドによって、また30年前にアルベール・メンミによって取り組まれていた問題¹⁵⁾——に取り組むための紙面を私たちは有してはいないが、少なくとも、カミュの仕事に充満しているオリエンタリストのまた地中海主義的な平凡な文句の多様性に言及しておくことは重要であろう。

あらゆる流れが通過する国際的な水域である地中海は、あらゆる地方のなかで、東洋の偉大な思想に接合するおそくはただ一つの地方なのです。なぜなら、地中海は古典的でもなければ秩序立っているわけでもありません。それは散り散りであり、波瀾万丈であり、まるでアラブ人街かジェノワやチュニジアの港のようです。人生の勝ち誇った味わい、意気阻喪と倦怠の感じ、スペインの正午のひとけない広場、昼寝、そういったところにこそ真の地中海があり、その地中海が接近してゆくのは東洋なのです。それは、あのラテン的西欧世界ではありません。北アフリカは東洋と西欧が共存しているわずかな国々の一つです。この合流点には、アルジェの波止場の一人のスペイン人や、イタリア人の生きかたや、彼らを取り巻いているアラブ人とのあいだに、なんの差異もありません。地中海的天分のなかにもっとも本質的なものが、東洋と西欧あいだに生れた地理や歴史上のこのユニークな邂逅から、おそくはほとぼしっているのです(Camus, 1967: 191–192[1972: 249])。

特定の生活様式、ゆっくりしていること、「アラブ的」、そしてより大雑把に言えば、本質化されたオリエンタを賛美するとき、カミュの地中海の表象は、地中海的魅力と地中海的キッチュとの紙一重のところを通り抜けている。それと同じように、カミュの「節度」——ポスト開発についてのいくつかの文献においても、また何人かの地中海主義者の著作においても、頻繁に出てくるテーマである。フランスの人類学者セルジュ・ラトゥーシュ(Latouche, 1999)の仕事のなかに、この両分野の接触地帯の最もはっきりとした表現を見出せる——に対する賞賛もまた両義的なものである。重要なことに、これはカッサーノによるカミュの第一作『裏と表』の読解、つまり地中海の陽光に満ちあふれる水域に夢中となる貧乏な(しかし幸福な)青少年時代を呼び覚ませている彼の『裏と表』の読解の全体に充満しているテーマなのだ

(Cassano, 1996[2006]: 98–101)。とりわけ、カミュの仕事における名誉の問題をカッサーノ(Cassano, 1996[2006]: 102–105)が強調するとき、地中海主義の人類学によって支持されていた(そして非常に見事にハーツフェルド(Hertzfeld, 1985, 2005)によって批判された)「名誉と恥」の文化に関する数多の平凡な文句の痕跡を認識するのは容易いことである。

カミュの仕事は、多くの点において、地中海の神話的またユートピアの次元を呼び起こしているわけだ(Davison, 2000; Haddour, 2000参照)。それは(本稿の冒頭で、私たちが示したように)、大衆レベルの叙述と科学的／アカデミックなレベルの生産物の両方を特徴づけ、20世紀におけるこの海のイマジナリーを永久的に形作ることになる「地中海主義美学」を先取りするものである。また、このことは政治的なものをめぐる理解へも拡張されている。「土着文化」と題された講演のなかで、カミュ(Camus, 1967: 190 [1972: 247])はこう論じている。「一つの教義なら教義が地中海という水盤に遭遇すると、その結果として起る諸観念の衝突のなかで無疵のまま残るのはいつも地中海であり、風土が教義に打ち勝ってきたのです」。実際、イタリア・ファシズムとドイツ・ナチズムとの間に区別を設けて、カミュは前者の「ある種の地中海的温かさ」と後者の狂信的な合理性とを対決させている。何人かの闘争的な地中海主義者によって表現されているが、北のヨーロッパ人、そして彼らの地中海を「食物にする吸引力」に対するあからさま敵意は、このような理解に依拠しているわけだ¹⁶⁾。しかしながら、それはヨーロッパとモダニティを別の方法で再考する有益な試みを、単純にオキシデンタリズムの地中海的改訂版へと還元してしまうという明白な危険を冒す態度以外の何ものでもない(Buruma and Margalit, 2004)。

にもかかわらず、カミュの仕事は、次の点においては助けとなるものでもある。それは、闘争的な地中海主義とその「地中海的オルタナティブ」を提供しようとする試みが有するもうひとつ別の基礎的要素の質を例示するという点においてだ。すなわち、はっきりとしたかたちを持っている個人レベルの人間主義を、集団レベルの政治的抵抗へと翻訳する／移行させるという問題だ。『反抗の人間』のなかで、カミュは「反抗は、すべての人間の上に、最初の価値をきざぎあげる共通の場である。われ反抗す、ゆえにわれら在り」(Camus, 1953: 28 [1973: 25])と書いている。しかしながら、エリソン(Ellison, 2009: 109–113)によって注意深く考察されている

ように、カミュの後の仕事(特に『転落』と彼の自叙伝『最初の人間』)は、それとは逆に、一方の個人的主体と他方の集団的行為のあらゆる形態との間にある回避不可能な緊張関係によって特徴づけられているのである。これは、ファール、カッサーノ、ゾーロ、そして他の闘争的な地中海主義者たちの仕事をもまた特徴づけている緊張関係だ。別様に言うなら、これはゆっくりしていること(ときには貧窮さえも、あるいは少なくとも「節度」)、また個人の自己実現を中心に置いた一連の「道徳的価値」を、無批判な私たちで頻繁に賞賛してしまっているということなのである。この意味で、初期の「正午」の思想にとって主要なインスピレーションの源であり、重要な討論の場であった雑誌『カイエ・デュ・シュッド』が、フランス語圏の文学的・芸術的前衛であって、大衆運動のもたらした所産ではないということを思い出しておくのは大切だろう。カッサーノ(Cassano, 1996[2006]: 105-108)は、カミュの仕事のこの側面には批判的ではある(地中海の事物に関する「貴族的パースペクティブ」)が、にもかかわらず、彼はこのような理解を、別のやり方で、いかにして集団的行為へと社会化／翻訳しうるのかということについては何ら提案できずにいる。

V 地中海から学ぶ

結論として、チェンバースの言う地中海の「根こぎにされた地理」のなかで想像されている、数々のオルタナティブ・モダニティに話を戻すことで、上述してきた議論の不足点のいくつかを乗り越えてみたいと思う。チェンバースからすれば、このような地理は、「ヨーロッパ人文主義、またそのモダニティとナショナリズムのもたらす利己的な客体化論理の手前で、狭間で、彼方で」地中海空間を描き出すものであり、「可視的なネットワークと不可視なネットワークの双方の多様な流れと複雑な結節点のなかで」(Chambers, 2008: 68)こそ表現されるのである。チェンバースの「地中海のいくつもの航海」の有する数々の空間性というのは、マトヴェイェーヴィチの言語学的旅によって描かれたいくつもの平行する歴史を直接的に語っていると考えられる。これらの空間性によってこそ、私たちは、固有の「地中海的モダニティ」の存在について疑問を突きつけるよう導かれることになるのだ。これは、他の学問分野で近年なされている地中海の議論につきまってきた問いであり、英語圏の人文地理学には著しく欠け

てきた問いでもある。

チェンバースのポストコロニアルないくつもの地理は、地中海を多様なルート[起源]とルート[経路]がたえず絡み合う／絡み合うための空間として刻む。これは「複数の要素が堆積してはまき散らかされている」ことの証左に他ならないのである(Chambers, 2008: 38)。チェンバースによると、ブローデルの「長期持続」のパースペクティブでは、地中海の「一体性」と同種の何かについて慎重に考えることはできるが、それはただ「北アフリカ、サハラ、サヘルから……中東を經由して、中央アジアのステップ地帯を横切って広がりながら、インダス渓谷とインド洋へと伸びる異質性にあふれるネットワークのもたらす歴史的諸条件」のただなかでこそ可能になるわけなのだ(p. 69)。だがそうは言っても、地中海は自らの「混合した構成要素」をひとつの均質なイメージに凍結させようとするあらゆる試みをたえず裏切ってしまうのである。チェンバースはここでこう提案する。地中海から「学ぶ」ためには、その南岸へと目を向けるべきであると。このようなパースペクティブのひとつが、ギル・アニジャール(Anidjar, 2003)の「交差-地中海」という理解によって提出されている。これは、「ヨーロッパ的また近代的であることに、またそのように生成することに対し、存在論レヴェルで異議を唱える流動的な地理のほうへと、私たちを運んでいく」ものである。その地理においては、「アラブ人とユダヤ人は、ヨーロッパのヨーロッパたる諸条件を、歴史的・文化的に構成してきた可視的かつ不可視な「敵」として提示されることになる……そこでは、多数の仲介と記憶の場としての海は、**ヨーロッパの内側にあるけれども、それを植民地化し管理制御しようとする西洋近代のあらゆる試みにもかかわらず、完全にヨーロッパに所属するというわけではないのだ**」(Chambers, 2008: 131, 太字は筆者たちによる)。

おそらくこれは、地中海のたぐさんの「思いがけない地図学」に最大限に取り組むようにというチェンバースの呼びかけのなかの最も重要な教えである¹⁷⁾。思うに、この呼びかけがナポリで生活し仕事をするイギリス人学者から届けられているのは偶然ではない。そのようなポジションが、チェンバースの次のような立論を可能にしているのだろう。それは「地中海から学ぶ」ため、「ジャック・デリダをバリの知的サークルのメンバーとしてよりも、地中海の思想家としてみなし読解する」べきというものだ。デリダは「マグレブ出身の思想家であり、ヨーロッパのロゴスの周辺から、それを批判する統語論を根

源的に形成し直す、植民地アルジェリア出身のフランス語を話すユダヤ人なのだ」(Chambers, 2008: 133)。これについては議論の余地があるだろうが、このフランスと地中海の結びつきは、ロバート・ヤング(Young, 2001)によっても、彼のポストコロニアル思想の考古学的なかで光を当てられている。ヤングは、デリダとフーコーの行った地中海の旅が、ポスト構造主義に与えた重要性について省察している¹⁸⁾。マルク・ゴールドシュミットは、自らが「まったくきマラーノのコスモポリティクス (cosmopolitique du marrane absolu)」と名づけるものを思索することで、この点についてさらなる注意を向けている。「まったくきマラーノのコスモポリティクス」とは、デリダの有するセファルディム、地中海、アルジェリアの起源を寄せ集め結び合わせるものだ。

マラーノの有する二重の戯れとは、二重の所属を意味するのではなく、二重の離反を意味している。それは二重の意味において、存在すると同時に消失する……このようなかたちでこそ、ジャック・デリダは、マラーノのなかに具現化されている隠れた証人という形象に、自身の語られないアイデンティティ、つまり見えない(見えなくされた)ユダヤ人、ユダヤ主義とユダヤ人集団から切り離れたユダヤ人としてのアイデンティティを認めることができたのだ。デリダは、このありそうもない形象を自分自身のジョーカーとして提供しながら、自身の哲学的企図の秘密の目録として、マラーノの二重の戯れを考えたのではないか？(Goldschmit, 2008: 143)

チェンバース(2008: 142)によれば、このような解釈は「アルチュセール、ブルデュー、ブローデル、フーコーとともに——フランツ・ファノン、エレヌ・シクスー、アジア・ジェパール」にも拡大できるということだ¹⁹⁾。しかし、その目的は、ただ目新しい「エキゾチックな」知の地図を示すことではなく、むしろ「思考・著作・批評を移動させることにこそある。つまり、西洋的トポスを経由して、より広大で、おそらくはなじみのない数々の布置へと通ずるような横断的航路を提示するべく、いくつものルートを交差させるということなのだ」。

こうして、私たちは冒頭の問いに戻ることになる。こうした「流動性のある」空間性から、地理学は何を学ぶことができるのだろうか——そして、地中海研究は地理学から何を学ぶことができるのだろうか？地中海主義の伝統がもたらす固定化された地理に立

ち向かうとき、おそらく(文化)地理学は地中海を「再考する」助けとなることができよう。大陸の地図学的近代性の合理性から逃れるような地中海のいくつもの地理の要素や現れを強調することによって、言い換えると、あるひとつの「地中海的まなざし」がどのようにすれば、「実際に」この海、そしてその住民たちの日常生活をつくり出している一連の非-地勢図的な地理を明らかにできるのかを例示することによって助けとなるだろう。したがって、それは単に本質化された地理に異議を唱えるという問題にとどまらず、「人文主義パラダイムのヘゲモニーに穴をあけ、それによって宣言されている倫理を、もっと不確実な批判的空間のなかで再編成する」というより広大な試みなのだ。地中海研究は、まさしくこのような批判的空間を必要としているし、またおそらくは、これこそが、地中海の経験から地理学が学ぶことができる——そして、地中海の経験に提供することのできる——ことなのである。

財政的支援

この仕事「レヴァントを新しいイメージにする (Re-Branding the Levant)」は、経済・社会研究評議会(ESRC)とトリノ大学のWWSプログラムによる支援を受けた。

注

- 1) 地中海についてのアカデミックな議論は、しばしばブローデルの仕事によって刺激を受けた大海洋の文化史とも関連づけられるものである。なかでも、太平洋についてのチャウドゥリー (Chauduri, 1985)、北海についてのローディングとファン・フォス (Roding and van Voss, 1996) を参照。またより最近では、「地中海」という用語についてのデヴィッド・アブラフィアの仕事 (Abulafia, 2005) がある。そこではこの用語は、地中海、さらには他の6つの「地中海」の存在を越えて、海洋空間のための比喩として理解されている。英語圏地理学における海洋空間の社会的・文化的構築については、大西洋についてのステインバーグの仕事 (Steinberg, 2001, 2009) を参照。
- 2) 地中海の歴史(と歴史記述)に関する論争の展望については、ハリス (Harris, 2005) 参照。
- 3) ティエリ・ファーブル監修のもと、2000年にメゾヌーヴとラローズ (Maisonneuve et Larose) 社によって出版された一連の書物は、南岸諸国のいくつかを選んで、それらの国々における地中海空間の認知と表象の包括的概観を提供している。エジプト (Al-Kharrat and Afifi,

- 2000)、モロッコ (Berrada and Kaddouri, 2000)、チュニジア (Belhaj and Boubaker, 2000)、トルコ (Cicekoglu and Eldem, 2000)、レバノン (Khoury and Beydoun, 2000)。より「文化的な」パースペクティブについては、ルナルとドゥ・ボンシャラの『地中海イマジネール』(Renard and de Pontchara, 2000) という北と南の両岸のパースペクティブを集めた選集を参照。
- 4) (ヨーロッパのパースペクティブからみた)「地中海の自然」をめぐる生態史については、デラノースミス (Delano-Smith, 1979) とヴィーターフィンツイ (Vita-Finzi, 1969) を参照。より最近では、グロヴとラッカム (Grove and Rackham, 2001) を参照。ブローデル流の長期持続によっては、歴史的また生態的パースペクティブが混ぜ合わされることで、唯一の統合された地中海空間が存在し持続していると想像されていることに言及しておくのも大切なことだろう (Braudel, 1998[2008])。
 - 5) ヴィダルの影響は、フランスでの地中海の記述を越えたところでもまた明白である。たとえば、ポルトガルのアイデンティティが定義される際の大西洋-地中海の相互作用に関するオルランド・ヒベイロの仕事 (Ribeiro, 1963) を参照。
 - 6) これは主流派であったヴィダル流フランス地理学のみではなく、ジャン・ブリュニュ (Claval, 1988; Clout, 2003) やエリゼ・リュクリュ (Arrault, 2005; Ruel, 1991) のような「アウトサイダー」の場合にも当てはまることだ。
 - 7) 地中海のヘゲモニックな解釈をつくりあげる上で、旅行記はいつもとりわけ重要なものであった。ベル・エボックのあいだに、ギリシャの島々 (Keeley, 1999) やアレクサンドリア (Decker and Womack, 2003; Dunn, 2006) についての文芸的神話が創出されたときの、ロレンス・ダレルの作品の影響、あるいはピエール・ロティの異国趣味化された地中海の放浪 (Gemie, 2000; Vercier et al., 2000参照) を思い出せば十分だろう。
 - 8) この問題は、ナポレオン遠征以降の中東への近代性の導入についてのより一般的な関心事を反映している (Zevi, 2004)。
 - 9) 数多くの論争を喚起したバナルの『ブラック・アテナ』(Bernal, 1987[2007]) が、ヨーロッパ文明のギリシャ・地中海起源の神話に、どれほど深く挑戦するものであったのかを思い出しておくのが有益だろう。この挑戦は、この神話が西洋近代文化という観念を支持するために考案された物語の産物であると主張することによって行われている (Berlinerblau, 1999; Bernal, 2001[2012])。
 - 10) バルタ (Balta, 2000); ラ・パラとファーブル (La Parra and Fabre, 2005) もまた参照。地中海連合の設立というサルコジ大統領のイニシアチブに対する批判については、パトリーとエスパニョール (Patrie and Español, 2008) 参照。トルコのEUへの加盟については、ヴィトクス (Vitkus, 2003) 参照。現代地中海の地政学については、ブラウンとテオドソプーロス (Brown and Theodosopoulos, 2004)、テキン (Tekin, 2008)、ビアラ
- ジーピッチらに寄稿されている文章 (Bialasiewicz et al., 2009) 参照。
- 11) とりわけ、ファールーク一世の治世の晩年に教育大臣であったターハー・フセインは、主に、彼のプログラムに基づいた1938年の本『エジプトにおける文化の未来』(Hussein, 1975) のなかで、ギリシャ・ローマの過去に遡るエジプト・アイデンティティの起源をたどるプロジェクトを展開し擁護することにおいて重要な役割を果たした。
 - 12) このトピックに関するフランスの議論は、大部分が『正午の思想 (La Pensée du Midi)』誌と、マルセイユで毎年開催される「アヴェロエスの出会い」と題された一連のワークショップに集中している。どちらのイニシアチブも、ティエリ・ファーブルによって率いられたものである。彼は、ここで私たちがフランスの「闘争的な地中海主義」として定義しているものの重要人物に相当する。
 - 13) これらの評論のいくつかの翻訳が、2007年の『歴史と人類学 (History and Anthropology)』誌18巻3号の特別号に公表されている。
 - 14) 本稿では、闘争的な地中海主義に関する分析を行っているが、私たちは故意に、闘争的な地中海主義の理論的根拠と、その地中海空間の表象史との関係にのみ分析をとどめている。しかしながら、この文献群は、パレスチナ問題から人道主義、女性の役割、民主化に至るまでの重要な政治的課題にも強く取り組んでいる (特にCassano and Zolo, 2007参照)。
 - 15) メンミ (Memmi, 1957) 参照; オブライエン (O'Brien, 1970)、サイド (Said, 1993[1998, 2001]: 特に第10章) もまた参照。「アラブ人」としての、無言の名もなき先住民としてのアルジェリア人たちの表象を含む、カミュの仕事のなかの植民地的ステレオタイプの存在については、タイエブ・ブゲラ (Bouguerra, 1989) 参照。カミュの想像力における女性と先住民の表象のフェミニスト批評に関しては、マルジェリゾン (Margerrison, 2008) 参照。カミュの地中海についての著作のより好意的な見解については、フォックスリー (FoxLee, 2006); ルブラン (Leblanc, 2002); ロルサン (Lorcin, 2002)。カミュをめぐる最近のポストコロニアル批評に関しては、トゥミ (Toumi, 2004) によって要約されている。英語でのカミュの仕事の分析については、「アルジェリア問題」へ格別に言及がなされているが、キャロル (Carroll, 2007) 参照。アルジェリア内戦とカミュの地中海プロジェクトの間の関係性に関しては、ゴンサレス (Gonzales, 2007) 参照。
 - 16) 地中海文明は反ドイツ的に記述されることがあるけれども、これはギリシャ-ローマの緊張関係に関するカミュやヴェイユの理解をはるかに越えるものとなっている。それは、北方人種やセム族の双方とは異なった「地中海人種」の存在についての民族誌的・人種的言説をも網羅しているのだ (Orsucci, 1999)。その上、反ドイツ論争は、20世紀最初の数十年間のカタルーニャのノウセンティスム (noucentisme) と地中海主義の不可欠の部分であった (Gonzalez Calleja, 2000: 64-90; Valcorba, 1994)。こ

- のような議論のなごりが、現代のスペインやカタールニヤによる地中海についての思索のなかになおも現存している(たとえば、Racionero Grau, 1986参照)。
- 17) 類似のパースペクティブについては、アルベラとクルスリ(Albera and Couroucli, 2009); ダクリア(Dakhliya, 2008); エプスタイン(Epstein, 2007); ハイベルガーエイベルジェとヴェルデル(Heyberger and Verdeil, 2009)もまた参照。
- 18) アルモンドは、イスラームをめぐってなされるポストモダンな表象を、「新しいオリエンタリズム」として解釈しているが、それ(Almond, 2007)もまた参照。
- 19) アニジャールとデリダについてのこの読解は、アラブ人とユダヤ人の間の積年の関係性(Alcalay, 1993; Hochberg, 2007参照)、イスラエルと地中海の間の長年の関係性(Ohana, 2006; またShohat, 1988, 1999も参照)を、幅広く再考するための場を切り開くものである。この関係性は、地中海において非常に重要な地政学的重要性を引き受けてきた。イスラエルのなかでその地中海的アイデンティティが徐々に意味のある政治的トピックとなっている時期においては、とりわけそうであろう(Del Sarto, 2007; Del Sarto and Tovias, 2001)。
- September.
- Balta P (2000) *Méditerranée: Défis et Enjeux*. Paris: L'Harmattan.
- Barcellona P and Ciaramelli F (2006) *La Frontiera Mediterranea*. Bari: Dedalo.
- Belhaj E and Boubaker S (2000) *La Méditerranée Tunisienne*. Paris: Maisonneuve et Larose.
- Berlinerblau J (1999) *Heresy in the University: the Black Athena Controversy and the Responsibilities of American Intellectuals*. Piscataway: Rutgers University Press.
- Bernal M (1987) *Black Athena: The Afroasiatic Roots of Classical Civilization*. Piscataway, NJ: Rutgers University Press. [マーティン・バナール(片岡幸彦訳)『ブラック・アテナ——古代ギリシャ文明のアフロ・アジアのルーツ1 古代ギリシャの捏造 1785-1985』新評論、2007。]
- Bernal M (2001) *Black Athena Writes Back: Martin Bernal Responds to his Critics*. Durham, NC: Duke University Press. [マーティン・バナール(金井和子訳)『「黒いアテナ」批判に答える(上・下)』藤原書店、2012。]
- Berrada M and Kaddouri A (2000) *La Méditerranée Marocaine*. Paris: Maisonneuve et Larose.
- Bialasiewicz L, Dahlman C, Matteo Apuzzo G, Ciuta F, Jones A, Rumford C, et al. (2009) Interventions in the new political geographies of the European 'neighborhood'. *Political Geography* 28(2): 79-89.
- Bistolfi R (1995) *Euro-Méditerranée. Une région à construire*. Paris: Publisud.
- Bouguerra T (1989) *Le Dit et Le Non-Dit à Propos de l'Algérie et de l'Algérien chez Camus*. Alger: Office des Publications Universitaire.
- Bourguet M-N and Licoppe C (1997) Voyages, mesures et instruments: Une nouvelle expérience du monde au Siècle de lumières. *Annales* 52(5): 1115-1151.
- Bourguet M-N, Lepetit B, Nordman D, and Sinarellis M (1998) *L'invention Scientifique de la Méditerranée*. Paris: Éditions de l'École des Hautes Études en Sciences Sociales.
- Braudel F (1972) *The Mediterranean and the Mediterranean World in the Age of Philip II*, volume 1. London: Collins. [フェルナン・ブローデル(浜名優美訳)『地中海(I-V)』藤原書店、2004。]
- Braudel F (1998) *Les Mémoires de la Méditerranée*. Paris: Éditions de Fallois. [フェルナン・ブローデル(尾河直哉訳)『地中海の記憶——先史時代と古代』藤原書店、2008。]
- Bromberger C (2007) Bridge, wall, mirror: Coexistence and confrontations in the Mediterranean world. *History and Anthropology* 18(3): 291-307.
- Brown K and Theodossopoulos D (2004) Others' others: Talking about stereotypes and constructions of otherness in southeast Europe. *History and Anthropology* 15(1): 3-14.
- Buruma I and Margalit A (2004) *Occidentalism: The West*

文献

- Abulafia D (2005) Mediterraneans. In: Harris WV (ed.) *Re-thinking the Mediterranean*. Oxford: Oxford University Press, 64-93.
- Aciman A (2008) *Call Me By Your Name*. New York: Atlantic Books.
- Albera D and Couroucli M (2009) *Religions Traverses: Lieux Saints Partagés Entre Chrétiens, Musulmans et Juifs en Méditerranée*. Arles: Actes Sud.
- Alcalay A (1993) *After Jews and Arabs: Remaking Levantine Culture*. Minneapolis, MN: University of Minnesota Press.
- Aldrich R (1993) *The Seduction of the Mediterranean: Writing, Art, and Homosexual Fantasy*. London: Routledge.
- Al-Kharrat E and Afifi M (2000) *La Méditerranée Égyptienne*. Paris: Maisonneuve et Larose.
- Almond I (2007) *The New Orientalists: Postmodern Representations of Islam from Foucault to Baudrillard*. New York: I.B. Tauris.
- Anidjar G (2003) *The Jew, the Arab: A History of the Enemy*. Stanford, CA: Stanford University Press.
- Antonsich M (1998) L'unità mediterranea nelle rappresentazioni geopolitiche del ventennio fascista. *Geotema* 12: 100-107.
- Arrault J-B (2005) La 'référence Reclus'. Pour une relecture des rapports entre Elisée Reclus et l'École française de géographie. Paper presented at the conference 'Elisée Reclus et nos géographies. Texte et Prétextes', Lyon, 7-9

- in *the Eyes of Its Enemies*. New York: Penguin.
- Cahiers du Sud (1943) Le Génie d'Oc et l'homme méditerranéen. Special issue of *Cahiers du Sud*, Marseille.
- Camus A (1953) *The Rebel*. London: Hamish Hamilton. [アルベール・カミュ (佐藤朔・高島正明訳) 『カミュ全集6 — 反抗の人間』新潮社、1973。]
- Camus A (1967) The new culture of the Mediterranean. In: Camus A *Lyrical and Critical*. London: Hamish Hamilton, 188–194. [アルベール・カミュ (佐藤朔・高島正明訳) 「土着の文化、新しい地中海文化」(『カミュ全集1 — アストゥリアスの反乱・裏と表・結婚』新潮社、1972)、245–252頁。]
- Carroll D (2007) *Albert Camus the Algerian: Colonialism, Terrorism, Justice*. New York: Columbia University Press.
- Cassano F (1996) *Il Pensiero Meridiano*. Bari: Laterza. [フランコ・カッサーノ (ファビオ・ランベッリ訳) 『南の思想 — 地中海的思考への誘い』講談社、2006。]
- Cassano F (2000a) Introduzione: Pensare da qui. In: Goffredo G (ed.) *Cadmos cerca Europa. Il Sud tra il Mediterraneo e l'Europa*. Turin: Bollati Boringhieri, 7–24.
- Cassano F (2000b) Contre tous les fondamentalismes: La nouvelle Méditerranée. In: Consolo V and Cassano F *La Méditerranée Italienne*. Paris: Maisonneuve et Larose, 21–42.
- Cassano F and Zolo D (eds) (2007) *L'Alternativa Mediterranea*. Milan: Feltrinelli.
- Chabot J (2002) *Albert Camus: La Pensée de Midi*. Aix-en-Provence: Edisud.
- Chambers I (2008) *Mediterranean Crossings: The Politics of Interrupted Modernity*. Durham, NC: Duke University Press.
- Chard C (1999) *Pleasure and Guilt On the Grand Tour: Travel Writing and Imaginative Geography, 1600–1830*. Manchester: Manchester University Press.
- Chaudhuri KN (1985) *Trade and Civilisation in the Indian Ocean: An Economic History from the Rise of Islam to 1750*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Cicekoglu F and Eldem E (2000) *La Méditerranée Turque*. Paris: Maisonneuve et Larose.
- Claval P (1988) Les géographes français et le monde méditerranéen. *Annales de Géographie* 97(542): 385–403.
- Clout H (2003) Visions of la 'géographie humaine' in twentieth-century France. *Geographical Review* 93(3): 370–393.
- Dakhlija J (2008) *Lingua Franca: Histoire d'une Langue Mètisse en Méditerranée*. Arles: Actes Sud.
- Davison R (2000) Mythologizing the Mediterranean: The case of Albert Camus. *Journal of Mediterranean Studies* 10(1–2): 77–92.
- Decker JM and Womack K (2003) Lawrence Durrell's Mediterranean dream: Reading the Alexandria Quartet and the Ethical Voice of the Sea. *English* 52(202): 37–52.
- Delano-Smith C (1979) *Western Mediterranean Europe: A Historical Geography of Italy, Spain and Southern France since the Neolithic*. New York: Academic Press.
- Del Sarto RA (2007) Wording and meaning(s): EU-Israeli political cooperation according to the ENP Action Plan. *Mediterranean Politics* 12(1): 59–75.
- Del Sarto RA and Tovias A (2001) Caught between Europe and the Orient: Israel and the EMP. *The International Spectator* 36(4): 61–75.
- de Pina-Cabral J (1989) The Mediterranean as a category of regional comparison: A critical view. *Current Anthropology* 30(3): 399–406.
- Deprest D (2002) L'invention géographique de la Méditerranée: Éléments de réflexion. *Espace Géographique* 31(1): 73–92.
- Dunn D (2006) Imagining Alexandria: Sightseeing in a city of the mind. *Journal of Tourism and Cultural Change* 4(2): 96–115.
- Ellison DR (2009) La pensée/le partage de midi: Le dernier Camus et la Méditerranée. In Baylee Toumi A (ed.) *Albert Camus Precurseur: Méditerranée d'Hier et d'aujourd'hui*. New York: Peter Land, 103–115.
- Epstein SA (2007) *Purity Lost: Transgressing Boundaries in the Eastern Mediterranean, 1000–1400*. Baltimore, MD: The John Hopkins University Press.
- Fabre T (2000a) La France et la Méditerranée: Généalogies et représentation. In: Izzo J-C and Fabre T, *La Méditerranée Française*. Paris: Maisonneuve et Larose, 15–152.
- Fabre T (2000b) Editorial. *La Pensée du Midi* 1(1): 2–3.
- Fabre T (ed.) (2004) *Colonialisme et Postcolonialisme en Méditerranée: Rencontres d'Averroes*. Marseille: Parenthèses.
- Fabre T (2007) *Eloge de la Pensée du Midi*. Arles: Actes Sud.
- Fabre T and Sant-Cassia P (2007) *Between Europe and the Mediterranean: The Challenges and the Fears*. Basingstoke: Palgrave Macmillan.
- Fogu C (2008) Futurist mediterraneità between Emporium and Imperium. *Modernism/Modernity* 15(1): 25–43.
- Foxlee N (2006) Mediterranean humanism or colonialism with a human face? Contextualizing Albert Camus, 'The New Mediterranean Culture'. *Mediterranean Historical Review* 21(1): 77–97.
- Freixe A (2002) Le Génie d'Oc et l'homme méditerranéen, du côté de Joë Bousquet. *Cahiers Simone Weil* 25(2): 89–131.
- Gallant TW (2002) *Experiencing Dominion: Culture, Identity and Power in the British Mediterranean*. Notre Dame: University of Notre Dame Press.
- Gemie S (2000) Loti, Orientalism and the French colonial experience. *Journal of Contemporary European Studies*

- 8(2): 149–165.
- Gilmore DD (ed.) (1987) *Honor and Shame and the Unity of the Mediterranean*. Washington, DC: American Anthropological Association.
- Gilmore DD (1991) *Manhood in the Making: Cultural Concepts of Masculinity*. Durham, NC: Yale University Press.
- Goffredo G (2000) *Cadmos cerca Europa: Il Sud tra il Mediterraneo e l'Europa*. Turin: Bollati Boringhieri.
- Goldschmit M (2008) Cosmopolitique du marrane absolu. In: Chérif M (ed.) *Derrida à Alger: Un regard sur le monde*. Arles: Actes Sud, 141–150.
- Gonzales J-J (2007) *Albert Camus: L'exile Absolu*. Houilles: Editions Manucius.
- Gonzalez Calleja E (2000) Les différentes utilisations de la Mare Nostrum: Représentations de la Méditerranée dans l'Espagne contemporaine. In: Vazquez Montalban M and Gonzalez Calleja E, *La Méditerranée Espagnole*. Paris: Maisonneuve et Larose, 31–135.
- Grove AT and Rackham O (2001) *The Nature of Mediterranean Europe: An Ecological History*. New Haven, CT: Yale University Press.
- Guarracino S (2007) *Mediterraneo: Immagini, Storie e Teorie da Omero a Braudel*. Milan: Bruno Mondadori.
- Guthenke C (2008) *Placing Modern Greece: The Dynamics of Romantic Hellenism, 1770–1840*. Oxford: Oxford University Press.
- Haddour A (2000) *Colonial Myths: History and Narrative*. Manchester: Manchester University Press.
- Harris WV (ed.) (2005) *Rethinking the Mediterranean*. Oxford: Oxford University Press.
- Heffernan M (1999) Historical geographies of the future: Three perspectives from France, 1750–1825. In: Livingstone DN and Withers CWJ (eds) *Geography and Enlightenment*. Chicago: University of Chicago Press, 125–164.
- Herzfeld M (1984) The horns of the Mediterraneanist dilemma. *American Ethnologist* 11(3): 439–454.
- Herzfeld M (1985) Of horns and history. The Mediterraneanist dilemma again. *American Ethnologist* 12(4): 778–780.
- Herzfeld M (2005) Practical Mediterraneanism: Excuses for everything, from epistemology to eating. In: Harris WV (ed.) *Rethinking the Mediterranean*. Oxford: Oxford University Press, 45–63.
- Heyberger B and Verdeil C (eds) (2009) *Hommes de l'Entre-deux: Parcours Individuels et Portraits de Groupes Sur la Frontière de la Méditerranée (XVI–XX siècle)*. Paris: Les Indes Savantes – Rivages des Xantons.
- Hochberg GZ (2007) *In Spite of Partition: Jews, Arabs, and the Limits of Separatist Imagination*. Princeton, NJ: Princeton University Press.
- Horden P and Purcell N (2000) *The Corrupting Sea: A Study of Mediterranean History*. Oxford: Blackwell.
- Hussein T (1975) *The Future of Culture in Egypt*. New York: Octagon.
- Jones A (2006) Narrative-based production of state spaces for international region building. Europeanization and the Mediterranean. *Annals of the Association of American Geographers* 96(2): 415–431.
- Jones A and Clark J (2008) Europeanisation and discourse building: The European Commission, European Narratives and European Neighbourhood Policy. *Geopolitics* 13(3): 545–571.
- Kayser B (1996) *Méditerranée, Une Géographie de la Fracture*. Aix-en-Provence: Edisud.
- Keeley E (1999) *Inventing Paradise: The Greek Journey 1937–47*. New York: Farrar, Straus and Giroux.
- Khoury E and Beydoun A (2000) *La Méditerranée Libanaise*. Paris: Maisonneuve et Larose.
- La Parra E and Fabre T (eds) (2005) *Paix et Guerres Entre Les Cultures: Entre Europe et Méditerranée*. Arles: Actes Sud.
- Latouche S (1999) *Le Défi de Minerve: Rationalité Occidentale et Raison Méditerranéenne*. Paris: La Découverte.
- Laurens H (2007) *Orientales*. Paris: CNRS Editions.
- Leblanc JR (2002) Camus, Said, and the dilemma of home: Space, identity, and the limits of postcolonial political theory. *Strategies: Journal of Theory, Culture and Politics* 15(2): 239–258.
- Lindenberg D (2000) Le mirage provençal de Charles Maurras. *La Pensée du Midi* 1(1): 52–55.
- Lorcin P (2002) Rome and France in Africa: Recovering colonial Algeria's Latin past. *French Historical Review* 25: 295–329.
- Magris (1987) Prefazione. In: Matvejevic P *Breviario Mediterraneo*. Milan: Hefti, 1–4.
- Malkin I (2004) Post-colonial concepts and ancient Greek colonization. *Modern Language Quarterly* 65(3): 341–364.
- Margerisson C (2008) 'Ces forces obscures de l'âme': Women, Race and Origins in the Writings of Albert Camus. Amsterdam: Rodopi.
- Mattéi JF (ed.) (2008) *Albert Camus et la Pensée du Midi*. Nice: Les Editions Ovadia.
- Matvejevic P (1998) *Il Mediterraneo e l'Europa. Lezioni al College de France*. Milan: Garzanti.
- Matvejevic P (1999) *Mediterranean: A Cultural Landscape*. Berkeley, CA: University of California Press. [プレドラグ・マトヴェイェーヴィチ (香掛良彦・土屋良二訳) 『地中海——ある海の詩的考察』平凡者、1997。]
- Meiering G (2000) Genèse et mutations d'une mémoire collective: La Méditerranée allemande. In Storch Q and Meiering G *La Méditerranée Allemande*. Paris: Maisonneuve et Larose, 39–85.

- Memmi A (1957) *Portrait du Colonisé: Portrait du Colonisateur*. Paris: Gallimard.
- Mignolo W (2000) *Local Histories/Global Designs: Coloniality, Subaltern Knowledges, and Border Thinking*. Princeton, NJ: Princeton University Press.
- Minca C (2003) Mediterraneo. In: Minca C (ed.) *Orizzonte Mediterraneo*. Padua: Cedam, 1–41.
- Nelis J (2007) Constructing fascist identity: Benito Mussolini and the myth of Romanità. *Classical World* 100(4): 391–415.
- Norwich JJ (2006) *The Middle Sea: A History of the Mediterranean*. London: Chatto and Windus.
- Obrador P, Crang M, and Travlou P (2009) *Cultures of Mass Tourism: Doing the Mediterranean in the Age of Banal Mobilities*. Farnham: Ashgate.
- O'Brien CC (1970) *Camus*. Glasgow: Fontana.
- Ohana D (2006) The Mediterranean Option in Israel: An Introduction to the Thought of Jacqueline Kahanoff. *Mediterranean Historical Review* 21(2): 239–263.
- Orsucci A (1999) Ariani, Indogermani, stirpi mediterranee: Aspetti del dibattito sulle razze europee (1870–1914). In Cassani A and Felice D (eds) *Civiltà e popoli del Mediterraneo*. Bologna: Clueb, 251–275.
- Pace M (2005) *The Politics of Regional Identity: Meddling with the Mediterranean*. London: Routledge.
- Paire A (1993) *Chronique des Cahiers du Sud*. Paris: IMEC.
- Patrie B and Español E (2008) *Méditerranée: Adresse au Président de la République Nicolas Sarkozy*. Arles: Actes Sud Sindbad.
- Prete A (2008) *Trattato della Lontananza*. Turin: Bollati Boringhieri.
- Racionero Grau L (1986) *El Mediterráneo y Los Bárbaros del Norte*. Barcelona: Circulo de Lectores.
- Renard P and de Pontchara N (2000) *L'Imaginaire Méditerranéen*. Paris: Maisonneuve et Larose.
- Ribeiro O (1963) *Portugal, o Mediterrâneo e o Atlântico: Esboço de relações geográficas*. Lisboa: Livraria Sá da Costa Editora.
- Rizzi F (2004) *Un Mediterraneo di Conflitti: Storia di un Dialogo Mancato*. Rome: Meltemi.
- Roding J and van Voss LE (1996) *The North Sea and Culture (1550–1800)*. Hilversum: Uitgeverij Verloren.
- Rodogno D (2003) *Il Nuovo Ordine Mediterraneo: Le Politiche di Occupazione dell'Italia Fascista (1940–1943)*. Turin: Bollati Boringhieri.
- Roessel D (2002) *In Byron's Shadow: Modern Greece in the English and American Imagination*. Oxford: Oxford University Press.
- Roth J (2004) *The White Cities: Reports from France 1925–39*. London: Granta Books.
- Ruel A (1991) L'invention de la Méditerranée, Vingtième Siècle. *Revue d'Histoire* 32: 7–14.
- Said E (1993) *Culture and Imperialism*. London: Chatto and Windus. [エドワード・W・サイード (大橋洋一訳) 『文化と帝国主義(1, 2)』みすず書房、1998, 2001.]
- Said S (2005) The mirage of Greek continuity: On the uses and abuses of analogy in some travel narratives from the seventeenth to the eighteenth century. In Harris WV (ed.) *Rethinking the Mediterranean*. Oxford: Oxford University Press, 268–293.
- Shohat E (1988) Sephardim in Israel: Zionism from the Standpoint of its Jewish victims. *Social Text* 19/20: 1–35.
- Shohat E (1999) The invention of the Mizrahim. *Journal of Palestine Studies* 29(1): 5–20.
- Steinberg PE (2001) *The Social Construction of the Ocean*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Steinberg PE (2009) Sovereignty, territory, and the mapping of mobility: A view from the outside. *Annals of the Association of American Geographers* 99(3): 467–495.
- Talbayer ET (2007) Between nostalgia and desire: L'Ecole d'Alger's transnational identifications and the case for a Mediterranean relation. *International Journal of Francophone Studies* 10(3): 359–376.
- Tekin BC (2008) The construction of Turkey's possible EU membership in French political discourse. *Discourse and Society* 19(6): 727–763.
- Temine E (2002) *Un rêve méditerranéen: Des saint-simoniens aux intellectuels des années Trente*. Arles: Actes Sud.
- Theroux P (1996) *The Pillars of Hercules: A Grand Tour of the Mediterranean*. London: Penguin.
- Tinguely F (2000) *L'Écriture du Levant à la Renaissance. Enquête sur les Voyageurs Français dans l'Empire de Soliman le Magnifique*. Geneva: Droz.
- Toumi AB (2004) Albert Camus, l'algerien(iste): Genèse d'Entre la mère et l'injustice. In: Chaulet Auchour C, Xuereb J-C, Chouaki A, and Saadi N (eds) *Albert Camus et les Écritures Algériennes*. Aix-en-Provence: Edisud, 81–91.
- Vallcorba J (1994) *Noucentisme, Mediterraneisme i Classicisme: Apunts per a la Història d'una Estètica*. Barcelona: Quaderns Crema.
- Vercier B, Quella-Villéger A, Scaon G, and Melot J-P (eds) (2000) *Les Méditerranées de Pierre Loti*. Anglet: Aubéron.
- Vita-Finzi C (1969) *The Mediterranean Valleys: Geological Changes in Historical Times*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Vitkus D (2003) *Turning Turk: English Theater and the Multicultural Mediterranean, 1570–1630*. Basingstoke: Palgrave Macmillan.
- Weil S (1960) *Écrits Politiques et Historiques*. Paris: Gallimard. [シモーヌ・ヴェーユ (橋本一明・渡辺一民編、橋本一明・伊藤晃訳) 『シモーヌ・ヴェーユ著作集1 戦争と革命

への省察——初期評論集〈新装版〉』春秋社、1998。]

Young R (2001) *Postcolonialism: An Historical Introduction*.
Oxford: Blackwell.

Ze'evi D (2004) Back to Napoleon? Thoughts on the begin-
ning of the modern era in the Middle East. *Mediterra-
nean Historical Review* 19(1): 73–94.

Zolo D (2007) La questione mediterranea. In Cassano F and
Zolo D (eds) *L'Alternativa Mediterranea*. Milan: Feltri-
nelli, 13–77.